

シベリア原住民の地理的概念

——今世紀初頭以前を中心に——

斎藤 農 二

【要約】 シベリア原住民の地理的知識がこの地方の近代的な地図の製作過程に一定の貢献をなしたことが指摘される。かれらが元来もっていた地理的知識といわれるものの中には原始的な宇宙観あるいは空間認識が含まれており、そのような概念も地図学史ないしは地理学史上、重要な意義をもつものと考えられる。シベリアに関する民族誌学的な研究によって原住民の地理的概念をさぐって行くと、いくつかの民族の宇宙観・空間認識に共通した特徴を見出せる。それは父系氏族制社会に起源をもつ小集団が狩猟・漁撈生活を営むために形成していた領域ないしは勢力圏の状態を反映したものであることがわかる。その実態は主として河川を中心軸とする、相互の力関係によって可動的な中心地域であり、それが小集団から大集団へと階層的な圏をなしていたと見られる。近代的な地図製作過程で有意義な貢献をなしたのはシベリア各地の原住民がもつこうした各勢力圏内に関するきわめて正確な地理的知識であった。

史林 六四巻六号 一九八一年一月

はじめに

「一七一—一八世紀地理的発見アトラス」の序文にはつぎのような主旨のことが述べられている。^①

先史時代における人類の地理的知識は文献・記録に残されていないため、その復元には民話、伝説の分析を含む民族学的研究や言語学、考古学の力も借りる必要がある。古い時代のシベリア原住民の地理的な概念や知識もこの例にあたり、その点、地理学史上すでに一定の位置づけがなされているフェニキア、ギリシャ、アラビア、中国などの諸民族の場合とは

異なっている、と。

一六世紀以降、本格化したロシアのシベリア進出にともない、ヨーロッパ側からみたシベリアの地理的発見あるいはその地図化が進められて行った。そうした探検・地図作製の歴史については、すでに多くの研究の蓄積があることは周知のところであるが、それらによってシベリア調査の経緯をたどって行って気付くことは、ロシア人ないしは広くヨーロッパ人の探検調査に際して各地の原住民がもたらした情報やかれらの協力のもっていた意義の重要性である。

すなわち、そうした調査の過程において、シベリア原住民がすでに持合せていたが未だ世界の地理学、地図学の共有財産の中に取入れられていなかった地理的知識が諸探検隊員の手を通してその財産目録に書き加えられて行ったという事実を見逃してはならないのである。探検史上、原住民が果たしたのは裏方としての役割であったが、他方かれらの持っていた本来の地理的概念とはいかなるものであったのか、それらの概念と近代地理学との出会いがもたらしたものは何であったのか、という興味ある問題もそこには出て来ている。

本稿ではこのうち、とくに民族誌的研究の分野に入ってシベリア原住民が元来もっていた地理的概念とその底にあると思われる北方狩猟・遊牧民の生活空間に主たる焦点を絞って考察してみたい。なお、本稿の一部の概要は別の機会に発表したが今回はそれに更に加筆し、発展させることにした。^③

① АТЛАС ГЕОГРАФИЧЕСКИХ ОТКРЫТИЙ XVIII-XVIII <НАУКА>
M. 1964. стр. VI.

② 船越昭生『北方図の歴史』講談社 昭51、たぐわしい。

③ Shinji SAITO, The geographical notions of Siberian peoples
(GEOGRAPHICAL LANGUAGES IN DIFFERENT TIMES
AND PLACES, KYOTO, 1980, pp. 18-21)

一 垂直方向と水平方向の概念

まず、近代的な地図との直接的な関連づけをなし難い原始的な宇宙・世界像から見て行かなくてはならない。それは、

いわば先史時代の地理的認識にあたるものであり、人間の原初的な地理的概念として、やはり地理学史上の位置づけがなされるべき課題であろう。

北アメリカのプエブロ・インディアンには宇宙は中空に浮んだ上下三層の円盤より成るという概念があったとされるが、^①シベリアの諸民族においても基本的には同様な垂直方向の構造の概念があったことが知られている。数例をあげてみよう。エニセイ川流域に居住するケート族においては、この大地は大きな円盤状をなし、上方に七つの天、下方に七つの地下があり、大地の周囲は七つの海に囲まれているという概念があった。^②

エニセイ川の西方にあって北流するタズ川流域のセリクープ族においては、人間の住む世界は皿状をなし、マンモスあるいは魚が下から支えていると考えられた。碗状をした天空が大地をおおうが、この天は七―九層（三層という物語もある）よりなり、第一層には太陽、月、星などがあるとされた。地下の世界は不明確であるが、第一層は死者の世界であり、悪霊が住み太陽の光を避けている、といった概念がうかがえる。

極東地方でもアムール川流域のナナイ（ゴリド）族においては天は一層あるいは九層をなすといった物語があり、地下には太陽は見えないがこの大地の上とまったく同様な世界があるとして、同じく上下の重層構造の概念が伝えられている。^④

北方ヤクト（トナカイ・ヤクト）族においても上方すなわち天の世界、中すなわち地上、それに下方の地下の世界の存在が考えられ、下方の世界とは北方であるとか、天の世界は一〇層あるいは一二層からなると見なされ、シャーマンはこの天の世界へ旅行するといわれる。^⑤

北方諸民族のこのような概念はいずれも天地開闢伝説と結びついている。モチーフの共通性から考えて、これらはすでに原形を失なった東ないし北シベリアの最古の住民のもっていた宇宙観を受継ぐものであり、上の世界は善なるもの、下の世界は悪なるもの、という概念への発展は後述のようにシャーマニズムの発生と関連があるという説がある。^⑥

こうした上下の宇宙観を図化した例にツゴルコフの紹介しているエベンキ族の古老セ・ミーン・ナジェインの描いた絵

がある。^⑦ その絵では宇宙は五つの陸地(プガー)からなり、(一)上の陸地、(二)中の陸地、(三)下の陸地のほかに(四)ドルボル陸地、(五)ブルジャール陸地の二つが側方に描かれている。ブルジャールは七つの海に囲まれた島ともいわれるが絵では七つの島である。(二)の中の土地すなわちこの世界を中心にして(一)が知的により優れた者の世界、(三)が死者ないし悪霊の世界とされ、(四)は(三)に類似し、(五)は(二)ないし(一)に類似したものというように説明されている。

さらには、こうした中空に浮ぶように描かれた陸地(世界)相互の間は、通常は岩によって塞がれているソルキットと呼ばれる穴を通して往来が可能であるとされ、さらに、陸地と陸地の間には海があって泳いで渡るといふ説明もなされている。

同種概念をもつ西部のエベンキ族の物語では各陸地を結ぶのは川であると説明する。その場合、川の源は上の陸地にあり、河口は下の陸地にあるとされる。セミヨン・ナジェインの絵では川は中の陸地にしか描かれていないが、それは現実に存在するヤナ川を示しているのである。

この中の陸地とは自分たちの住む現実の土地に当るとする考え方は、いずれの民族にも共通していると思われる。先にあげたケート族では自分たちの住む世界はエニセイ川が中心であると考えている。^⑧ かれらの開闢伝説ではこの世界ははじめ天と水のみであったが、ある時、水鳥のアビが飛来して水に潜り、一口の泥をくわえて浮上して陸地をつくったという。かれらには、また、洪水によって一旦滅んだ世界が一部の泥炭地が浮上することによって甦ったという物語もある。このような話はひろく北方の森林ツンドラからツンドラにかけての諸民族に見られるモチーフであって、北氷洋に注ぐ河川の中・下流域における春の洪水や沼沢の多いツンドラ特有の地形など、かれらの居住する地方の環境の反映であると思われることができる。

ところで、自分たちの住む土地と上、下の陸地(世界)の間を結ぶ川、という概念をケート族においては、エニセイ川がそれに当ると考えられているわけであるが(ただし、上中下の世界をとりまく海とこのエニセイ川との関係は説明がつかない)、こ

の川の源が上の世界、河口が下の世界にあるとし、これに善、悪の靈に関連した二元論の天地開闢伝説が結びついているのである。善なるものを創造したエシと悪なるものを創造したドテト、あるいは善靈アリベと悪靈ホセダムとの戦いの物語がそれである。

エシの創造した善なるものにはエニセイ川の上流地方があり、そこはケート族の祖先の地であって南の暖かい土地であると考えられ、ドテトの創造した悪しきものにはエニセイ川下流地方の暗く冷たい土地がある、というのがその基本的な筋書きである。善悪の世界を結ぶ川エニセイがこれらの土地を貫流しているのである。そしてこれらの居住する地域の地理的環境、動植物のすべてにわたってこの二元論でそれらの起源が語られるのである。

このようにケート族のエニセイ川についての概念をみて行くと、「上の世界」―エニセイ川上流地方―南、「下の世界」―エニセイ川下流地方―北、ということになる。南の方向には天と地の境があり、天への入口にはトマンと呼ばれる守護者がいると考えられている。事実、ケート族の住む地方から見たエニセイ川の上流側は山岳地帯となり、川は峡谷をなして崖が多くなっているのである。毎年、トマンがエニセイの岸に現われ、崖の上で袖を振ると綿毛が落ち、それらは渡り鳥となってエニセイ川に沿って北へ飛んで行く。善なるものが北に赴き、春が訪れるのである。その北方にあるエニセイ川下流地方には厳しい寒さをもたらす靈ウセンが住むという物語やそこにはエシのもとで悪靈となったホセダムが住む家がエニセイの河口の地下にある、といった話がある。

東西方向についてみると、水のあふれる側―西、岩石の多い側―東という概念がある。これは現実の地形を指すのであって、前者がエニセイ川以西の広大な西シベリア低地を、後者がエニセイ川以東の中央シベリア台地の山地をいうのである。ところが、この東西方向に関しては太陽との関係で別の概念がある。太陽はさらに朝・夕、昼・夜、暖・寒などの現象の説明と関連している。

以上の結果、東―日の昇る方向―善・再生・生命―南の方向―暖かい土地―神の方向、に対するものとして、西―日没

の方向 \parallel 悪・死 \parallel 北の方向 \parallel 寒い土地 \parallel 悪魔・病の方向、という二つのカテゴリーに分かれるのである。つまり、「上の世界（または土地）」とは垂直方向では天空の七層の世界（土地）に当り、我われの見る空である。同時にこれが水平方向では南ないしは東、またはエニセイ川上流地方である。「下の世界（または土地）」とは垂直方向では地下の世界（土地）であり、同時にこれが水平方向では北ないしは西、またはエニセイ川下流地方である、ということになると考えられる。

このように垂直方向と水平方向とが結びついた概念はケート族に限らず、セリクープ、エネツ、ネネツ、エベンキ、チユクチなどの各民族にも多少の異同を含みながら、ほぼ共通してみられる。^⑩ E・A・アレクセンコはこれについて、原初的には太陽の動きに関して日の出と昼の方向すなわち東と南が善なるもの、日没 \parallel 西と北の方向が悪なるもの、という水平方向の概念が存在したのであったが、シャーマニズムと結びついて上方の偉大にして強力なるものと下の世界の否定的性格、という垂直方向の概念が発展して来たとしている。

しかし、水平方向と垂直方向の概念について、前者から後者への発展とは割切ることのできない混然とした概念、といったものを考えてみる必要があるであろう。先のセミヨン・ナジエインの絵も平面上に強いて描いた結果、上下関係、側方関係に矛盾が生じてしまっているように見えるべきで、本来、これはこうした形で図化し得ないものであろう。

北方諸民族における以上のような宇宙像 \parallel 世界像は決して単なる空想の産物ではなく、現実の社会関係、生活空間から来ていると考えられるので、それらの問題をさらに民族誌の中に求めてみることにする。

⑩ 山野正彦 空間的研究方法の非計量的側面（一九七八年人文地理学会大会配布資料） なお、世界各地の未開社会あるものは日本の古代の空間概念について、山野正彦、千田稔らの報告がある（『人文地理』第三一卷第一号ほか）。

⑪ E. A. Alekseenko, Представление Кероо о мире. (ПРЯРОДА И ЧЕЛОВЕК В РЕЛИГИОЗНЫХ ПРЕДСТАВЛЕНИЯХ НАРОДОВ СИБИРИ И СЕВЕРА (НАУКА) Л. 1976. стр. 76)

⑫ E. H. Прокофьева, Сравне представление Селькютов о мире. (Там же. стр. 106)

⑬ A. B. Сюзюк, Представления Ханцев о мире (Там же стр. 194)

⑭ И. С. Гурвич, КУЛЬТУРА СЕВЕРНЫХ ЯКУТОВ-ОЛЕНЕВЦЕВ (НАУКА) М. 1977. стр. 194.

⑮ Там же стр. 200-201.

⑯ B. A. Губошников, СЛЕДОПЫТЫ ВЕРХОМ НА ОЛЕНЬХ (НАУКА)

M. 1969. срр. 拙訳「トナカイに乗った狩人たち」刀水書房 昭56
口絵。

⑧ E. A. Азареевко, Иперсрамаина Керон..., (срр. 72)
⑨ 右記の諸論文。

二 エベンキ族のシャーマンとチュム

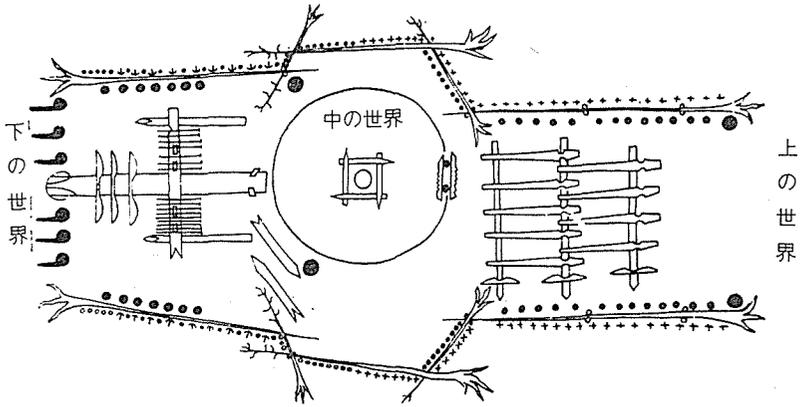
今世紀初頭の頃まで、北シベリアの原住民の間には血縁の氏族を単位とするものを含む小集団の社会組織がひろく見られた。かれらの生活の基盤は狩猟・漁撈・トナカイ飼養であったから、各集団には相互の力関係や自然環境の変化に応じて大なり小なり可動性をもった一定範囲の領域あるいは勢力圏が存在した。すなわちそれは決して発展した農業社会におけるように固定した境界をもつものではなかったことは確かである。それぞれの集団が生活する範囲——主として川筋、湖沼にその中心があった——については、きわめて正確な地理的知識をもつことは必要不可欠であったのに対し、自分たちの勢力圏外に関しては隣接する他の集団を介して伝えられる情報以外に依るべき根拠は少なく、遠隔地になるほどその情報は曖昧となり、ついにははなはだ荒唐無稽な概念を生むまでに変質したであろう。

ここでは、一つの集団が自分たちの運命をかけた重大な決断を迫られた場合——病氣と近隣の他集団からの攻撃——に催されたシャーマンの儀式(カムラーニエ)の際に設けられた特別な式場としてのシャーマンとチュムとその付随物のプランを例示し、これがいわば「中の世界」を中心とするきわめて様式化された居住空間の表現であるということを示明らかにしてみようと考ええる。資料はアニシモフにより一九二〇——一九三〇年代にエニセイ川右岸支流ポドカーメンナヤツングースカ川流域で蒐集されたエベンキ族の例である(図1)。

まず、シャーマンとチュムのプランは大きく三つの部分に分けられ、チュム本体とそれをさんだ左右の回廊から成っている。中央のチュムは「中の世界(ドゥーリユー)」であり、入口は東向きである。右側(東)の回廊(ダルベ)が「上の世

⑩ チュムキ族に関しては И. С. Блюгин, Починковые кумышты Чурачей (ТАМСТНИКИ КУМЬШТЫРАЙ НАРОДОВ СИБИРИ И СЕВЕРА ТУВКИЯ) II, 1977. срр. 121-125

⑪ E. A. Азареевко, Иперсрамаина Керон..., (срр. 91.)



③
図1 シャーマン=チュムの平面図

界」へ到る川筋を表わしている。左側の回廊(西)は「下の世界(オナング)」へ到る川筋である。換言すれば、上の世界のある東方から自分たちの住む中の世界を経て下の世界のある西方へと川が流れていることを表わしているのである。^④

このチュムは通常の住居として使用される円錐形住居と同型であるが、集団のメンバー全員(但し成人男子のみ)——後述——が入れるように大形のもので建てられる。中央に小さな炉が置かれ、その傍から煙穴を通して上に伸びる細いカラマツの若木が立っている。この若木は上方が上の世界であり、根元の下方が下の世界であるという「宇宙=世界樹」なのである。この若木の位置は、また、一族のトーテム中心であり、一族の守護者たる霊が宿るところであるとする概念がある。

炉をはさんで入口と反対側すなわちチュムの奥座にタイメニ(魚の一種)の霊を表わす木製の魚を並べたイカダが据えられる(本図では省略)。シャーマンがこれに座り、川を航行して他の世界へ赴くことを示す。シャーマンの座の左右にはカラマツの若木で作った槍の類とカワカマスなどの魚の像が並べられる(本図では省略)。槍はシャーマンが他族の悪霊と戦う武器の霊であり、魚はシャーマンの助力者たる霊であることを意味している。

チュムの入口から東へ延びる上の世界への回廊、ダルペを見よう。この両縁には根のついたままのカラマツの小さな若木(ネルゲト)^⑤が垣状に、但し根

を上、梢を地面に向けて並べられている。これらは垂直方向における上の世界の樹木を意味し、根は上の世界にあり、梢は人びとの側——中の世界——に向いていることを表わす。これらネルゲトの列の上に根のついた細長いカラマツが根を東、梢をチュム側に向けて横たえてある。水平方向における上の世界から中の世界へ樹木がのびていることを意味しているのである。また、ネルゲトの生垣の間にはシャーマンの配下の霊であり、上の世界への道の守護者たるホモケンを表わす木彫の人形が並べられている。これらは故人となった一族の者たちのかつての魂の守護者であったものであり、シャーマンはこれらに向っては祖父、祖母、氏族の祖、氏族の守護者、といった呼びかけをする。

ダルベを横切るように木製の大きな野生トナカイ(カリル)が置かれている(本図では三頭)。カリルはシャーマン配下の最も強力な霊と考えられ、カムラーニエの際にシャーマンの困難な頼みを遂行すべく、その乗用トナカイとなってすべてのシャーマン配下の他の霊たちの指導者となるのである。

カリルの背の上には回廊と並行にシャーマン配下の霊たる木彫の魚、タイメニ(デルボン)が並べられている(本図では九匹)。これらの魚も上の世界への道を守りながら川を泳いでいるのである。

さらに、チュムの入口の前には大形のカワカマス(グトケン)の霊の木彫二匹が置かれ、それぞれの真中に四角な穴があげられており、上の世界への入口をなすとされる。二匹のカワカマスの間には二つの木彫の人形が立てられている。これらのカワカマスと人形は中の世界から上の世界への戸口を守っていることになる。

このように配された川の上流の彼方にある上の世界には一族の「魂の保管所」(オミルク)があるとされ、そこはまた一族の祖先の地でもあるといわれる。そこには不滅の魂たち(オミ)が住む大きなチュムがあり、魂はある期間ここに住んだ後、再び中の世界へ戻って新しい世代の人間として蘇えると考えられている^⑥。

つぎに中の世界を表わすチュムの西側に延びる川の下流、下の世界への回廊、オナングを見る。

これは死者の川であり、従ってすべて枯れたカラマツで作られている。ここではネルゲトおよびその列の上に横たえら

れる細長い木は、いずれも根は下の世界にあることになるから根元を前者は下に、後者は西に向けてある。

オナングの両縁のネルゲトの間にお枯木で作ったさまざまな霊たちが立てられている。アビ、カモ、ガチョウなどいずれもシャーマン配下の霊であって、下の世界への道を守っているのである。

チュムのすぐ脇にシャーマンのごく近い祖先の霊を表わす二つの人形(シェウエン)が立てられ、死者の世界への戸口を守っている。これらの人形のそばにカワメンタイ(シェガン)を型どった木株が二個横たわり、下の世界からオナングを通じて侵入してくるあらゆる悪霊を「カエルの如く呑み込む」とされる。

オナングの中央には木製の巨大なヘラジカとその両脇にアカシカが据えられている。これら三頭のシカの背と直角の向きに大きな木彫の魚、タイメニが置かれ、これらには四個の穴——悪霊を捕えるワナ——があげられている。さらにこれらのタイメニには多数の枯れたカラマツが柵状に立て掛けられ、それらの先端には守護者たる鳥の霊を型どった木片がつけられている。

オナングの末端には槍をかまえた木彫の人形(本図では六本)が立ち、悪意を抱く他族のシャーマンが派遣してくる悪霊——オコジョ、オオカミ、アナグマなど獣の霊やカワカマスなど魚の霊——が河口から侵入してくるのを防ぐ役目を担っている。とくに、川の下流から上の世界にまで敵の霊が及ぶと一族の祖先の地、魂の保管所が破壊され、不滅の魂までもが死の世界に運び去られ一族は滅亡することになるから、下流域の防備は厳重に行なわれなくてはならないと考えられた。

この下の世界へ流れる川の河口には死者たちの宿营地があるといわれる。シャーマンは死者をここに導き、同族者の死者たちに新たな死者を引渡すのである。

このような配置からなるシャーマン・チュムに一同が出席して敵意を持った他の集団のシャーマンが派遣して同族者に病や死をもたらす悪霊と戦うための儀式としてのカムラーニエが催される。一言でいえばそれは厄払いの儀と報復の儀で

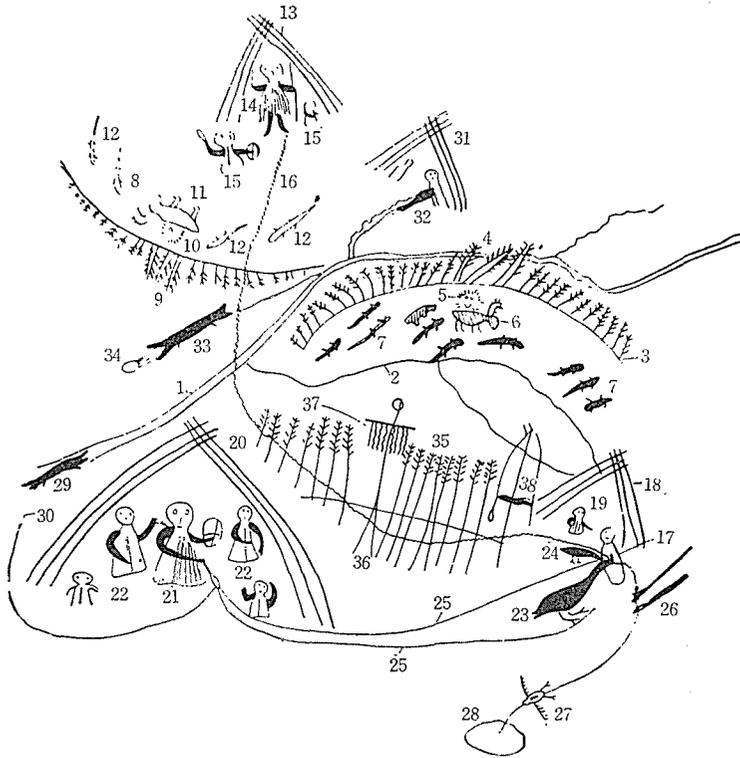
ある。シャーマニズムに関わるさまざまなその内容や意味についてはこれ以上は触れないが、注目すべきは水平・垂直の概念がこのシャーマン・チユムのプランに混然として存在すること、このプラン全体が一族の居住域あるいは勢力圏を象徴的に表現していること、それが川筋として示されていることである。

なぜこれが川筋として表現されるのか、という理由はエベンキ族の生業と密接な関係がある。かれらはトナカイ飼養をともなう狩猟民であるが、安定した食料獲得手段として漁撈が大きな意味をもっており、かつて各氏族集団がほとんど河川を軸とする勢力圏をもっていたことの反映であろう。ダルペやオナングを「氏族の川」と呼び、これによって示される川筋に沿った一帯のタイガ、天空、地下が祖先、死者の世界をも含む一族の宇宙であると見なされていたのである。^⑧

シャーマン・チユムの縁をとり囲むネルゲトの間や氏族の川の中に配置された諸々のシャーマン配下の木彫の霊は概念的に各集団の勢力圏内に配置されていると考えられる諸霊の具現化である。すなわち、一族の勢力圏の境界にはシャーマンが霊たちを配置して一族を守っているとされた。その境界線をなす目には見えない逆茂木の線は一方の尾根筋から他方へ、また川から川へと張りめぐらされ、これによって囲まれた内部が一つの小世界あるいは小宇宙をなしていると考えられた。この境界線やその領域内で鳥の霊は空から、獣の霊はタイガの中で、魚の霊は川の中で、それぞれこの小世界に住む一族を守護しているのである。

ところが、それらの霊たちによる防備は完璧ではなかった。エベンキ族の間には病や死をはじめさまざまな不幸や災難が侵入して来た。境界線が破られたのである。不幸が訪れるとシャーマンはカムラーニエを催して破られた逆茂木を再建し、弱いあるいは怠慢な霊の見張りを強力にして忠実なる霊と取替るのであった。

家父長的権威を持つシャーマンを中心とした現実のかれらの生活は、一応各集団ごとに自給的孤立的な領域をなしているが、近隣の集団との境界は後述のようにさほど明瞭である必然性はなかった。隣接他集団と近縁関係にあるなど友好的



⑩
 図2 モモリ、ニュルムナリ両氏族の戦いの図

凡例 1 ボドカーメンナヤロツングースカ川。2 同川支流。3 モモリ氏族の土地。④氏族の聖木——氏族の宗教儀式挙行地点。5 氏族の領域の霊。6 氏族の守護者たる霊(ガドク)。7 シャーマンの番人たる霊よりなる境界の遊茂木の垣(マリリヤ)。8 ニュルムナリ氏族の土地。9 彼等の氏族の儀式の場。10 ニュルムナリ氏族の守護者たる霊。11 彼等のブガドク。12 ニュルムナリ氏族のシャーマンの番人たる霊よりなるマリリヤ。13 ニュルムナリ氏族のシャーマンのチェム。14 ニュルムナリ氏族のシャーマン。15 同助手。16 モモリ氏族を滅ぼすべくニュルムナリ氏族のシャーマンから派遣された霊の跡。17 モモリの氏族内に侵入したニュルムナリ氏族のシャーマンの霊が蛾となってモモリの一人の体内に入り肉体の魂を亡ぼしはじめた。18 病人のチェム。19 彼の妻。20 モモリ氏族のシャーマンのチェム。21 シャーマンがカムライニエを行ない同族者の病の原因を知ろうとする。霊がシャーマンと一同に事の次第を語る。22 カムライニエに出席した同族者たち。23 シャーマンの霊たるガチョウ。24 同じくシギ。この両者は病人の体内の病霊を捕えようとする。25 シャーマンの霊の通過跡。26 病霊は病人から飛出して逃れる。シャーマンの助力者たる割木と槍が病霊を捕える。27 モモリ氏族のシャーマン配下の霊たるフクロウが病霊を呑込み、下の世界の深淵へと運ぶ。28 下の世界への入口。29 モモリ氏族のシャーマンはニュルムナリ氏族へ報復のため配下の霊たる双頭のカワカマスを送る。30 彼の通過跡。31 ニュルムナリ氏族員のチェム。32 カワカマスの霊が病人の肉体の魂を抜く。33 カワカマスの霊がその魂を選び去る。34 肉体の霊。35 モモリ氏族のシャーマンは他氏族のシャーマンの魂の通過跡にカラマンの霊の垣をつくる。36 他氏族の霊の通過跡に割木の番人を立てる。37 供物として吊された獣皮。38 天の神に犠牲として捧げられたトナカイの皮。

な場合はほとんど問題はなかったであろう。しかし、この種のカムラーニエが催されるような敵対関係にある場合は相互の境界はかなり明確な線として意識されたと思われる。

エベンキ族の古老ワシリー・シャレミクタリが描いて説明したという敵対関係にあったモモリ、ニウルムナリ両氏族のシャーマンの戦いの図を見よう。地図としての精度という点では、これは後述のユカギール族の例に較べて劣るが、北方民族における勢力圏の様子を具体的に図化したものとして興味深い(図②)。

これは図の中程に弧を描いて横切るポドカーメンナヤ・ツングースカ川(エニセイ川右岸支流)を境界とする二氏族がそれぞれ同川の小支流を中心とする勢力圏をもち、相互に敵対関係にあることを示している。図の上部のニウルムナリ氏族のシャーマンが下部のモモリ氏族の一員に病の霊を送って来たのに対し、モモリのシャーマンが配下の霊にその病の霊を退治させ、逆に復讐のためにニウルムナリの一員を殺すという物語を表現している。モモリは歴史上、トナカイ所有頭数の多い富裕な氏族として知られ、一七〇一年—一七〇八年にかけて他のグループからしばしば襲撃されたが、それらを撃退しているから、この図は実際に起った衝突にまつわる話を示したものであろう。^①

この図の中には現実の土地——中の世界——が主として描かれ、上の世界は犠牲を捧げる場所などのほかには描かれず、下の世界もその入口が示されているにすぎないが、前述のような霊的存在のありようが現実の空間でどのように意識されていたかがうかがえる一例である。

① ЧУМ (円錐形住居) 細長い樫十本を頂上で一点に集まるように円錐形に並べて骨組とし、外側から白樺樹皮か獣皮をかけたもの。頂上は煙出しと明りとりのためにおおいがない。

② А. Ф. Амиснов, Шаманский чум у эвенков и происхождения шаманского обряда. (СИБИРСКИЙ ЭТНОГРАФИЧЕСКИЙ СБОРНИК XVIII (ЧАУКА) Л. М. 1952, с. 199-203) 上記論文の本頁はシャーマニズムの起源を論考したものであり、本稿の内容とは異なる。

③ Там же. (стр. 211) 本図の全景は前節注①の拙訳書口絵参照。

④ この図では左右の回廊はごく短かいが、同じくエベンキ族のシャーマン・チュムで中央のチュムの直径の二倍余りの細長い回廊がついてる図の例がある。一九三三年、メーヌロン蒐集のものがそれである。 План шаманского чума. Эвенки. По Суслову, 1932. (С. В. ИВАНОВ, СКУЛЬПТУРА НАРОДОВ СЕВЕРА СИБИРИ. XIX-Первой половины XIXв (ЧАУКА) Л. 1970, с. 153)

⑤ 冬期、凍土から根のついたままの木を採取できない場合は幹の根元を割裂いて根に似せる。

⑥ これらの間では人には二種の魂があるとされた。死後、上の世界へ赴く不滅の魂と、下の世界へ行くものとである。

⑦ А. Ф. Анчисоф, Шаманский чум... (стр. 226)

⑧ Там же. (стр. 228)。すなへて一筋の川に沿って「*голь*」と「*голь*」。

⑨ この図もシャーマニズム、アニミズムに関するさまざまな要素を含む

むが、ここでは居住空間の表現ないし一種の地図としての観点からみておく。

⑩ А. Ф. Анчисоф, Шаманский чум... (стр. 221)

⑪ シリヤギール部族 (ТЛЕКЧ) の内乱として記録に残っている。—— ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТОРОЖЬ НАРОДОВ СЕВЕРНОЙ СИБИРИ (ИЗВ. УКА) М. 1970. стр. 100-101. — 但し後述のヤクニニナルムナリは別の部族に属したとも考えられる。

三 北方民族の社会規模とその領域

一つのチュムに一族が集まったところでシャーマンがカムラーニエを催した、というならばそうしたグループはいかなるものであったかを知る必要がある。

ドルギフの計算ではロシア人到来前(一七世紀)の北シベリアの人口密度は平均して一平方キロ当り〇・〇八人であった。もちろん、地方的民族的な相違があつて、エニセイ・レナ両川間のエベンキ族では一平方キロ当り〇・〇三人、オホーツク・エベンキ族〇・〇一二人、タイガ帯のセリクープ族では〇・〇一五人となつてゐる。^①

このような希薄な人口密度の下で住民は血縁集団による比較的小規模な社会を形成して生活しており、一般にそれは父系氏族社会組織^②であつたとされている。地域的・民族的にそれは五つのタイプに分類されている。すなわち、(一)ユカギール、ヌガナサン、ツンドラ・エベン、ハタンガ川流域のエベンキの原初的父系氏族。小規模で比較的不安定な構成をなし、首領が氏族創設者の名を氏族名称とする。この集団はそのまま一個の生産単位、狩猟・遊牧グループでもある。(二)森林エベン、北ケート、エベンキとエベンの大部分、ネギダールの各氏族集団。大規模、広領域、明確な社会構成、一定の特徴のある氏族名称(河川名など)をもつた外婚単位。但し、生産単位ではなく、生産活動はさらに下位区分されるサブグループで営まれる。(三)ネネツに見られるタイプで前者に近く、明確な氏族名称を有し、下位区分のない七つの大氏族より成つ

た(一六九五資料)。但し、一氏族が二つの外婚グループに分れているものを含む。(四)ハント、マンシ、セリクープ、南ケート。氏族としてはきわめて曖昧であるが、社会組織上、いずれも二つのサブグループに分れている。(五)北東の古アジア族に属するコリヤーク、チュクチ、イテリメンのタイプ。単系の血縁組織が未発達で、氏族組織を欠いているという解釈もある。

これよってみると、本稿に関連をもつのは(一)、(二)のタイプであろう。これらに属するグループの成員数はどのくらいであったろうか。直接それを伝える資料はなくヤサク(毛皮税)台帳に納税者に当る成人男子——前述のカムラーニエの出席者でもある——の名前が載っているのに基づき、概数が算出されている。^④

一六四五—一六八二年のそうした資料によればトナカイの狩猟を主たる生業とする(一)のタイプでは平均して一七人となっている。それぞれが生産単位をなすから、野生トナカイの少ないところでは七—一〇人程度、大群のいるところでは大規模な狩が行なわれる場合(トナカイの渡河点での刺殺)、一四—一六人以上のグループがあった。また、有利な狩場を占めるとか優れた指導者のいるグループは比較的大きくなる傾向があった。^⑤当然、獲物の多寡、指導者の手腕いかなによってメンバーに出入りが生じ、他グループを吸収することもあれば、他グループの侵入による一族の破滅もあり得た。

(二)のタイプは氏族組織として、より強固であり、広い勢力圏をもっていた。トナカイ飼養エベンキの例では、クヌギール氏族二八〇人からシャマギール氏族一〇〇人まであり、平均すると約一四一人という数字が出る。^⑥

ところが、この中の例えばククギール氏族というのをとってみると総数は一一二人であるが、一六七二年にサブグループとして各々人数一四、一三、一三、一二、九、八の六つの「父系グループ」に分れていたことが知られ、これらの規模は(一)のタイプに近いことがわかる。すなわち、ククギール氏族は、実際には一五歳以上の男子八一—四人つまり二ないし四家族が生産単位をなし、主としてこうした小集団ごと(狩猟—遊牧を営んでいたことになる)。

従って(二)のタイプは氏族であるとするよりはその連合体としての部族であると解することができ、氏族、部族の用語上

の混同を整理すれば(二)は(一)がより発展した段階であるとみることができ^⑧。先のモモリが属していたのはシャリギール部族で一七世紀のこの部族の勢力圏はニジナヤツングースカ川上流、レナ川とその支流、ウィチム川におよび、ロシア当局はこれをクレイスカヤ郷のツングースとしていた。そして、この中に六氏族が含まれ、一六四五年には総人口一〇三〇人であったといわれる。他方、ニユルムナリは実は別の部族であって、一七世紀前半にはニジナヤツングースカ川中流、ウィリユイ川上流に勢力圏をもち、ロシア当局ではヤサク支所の名からイリムピスキーツングースとよび、四氏族七五〇人であったといわれる^⑨。モモリやニユルムナリのいずれも今世紀初頭までの間に各部族内あるいは他部族の一部と離合集散があったことが明らかで、(二)のタイプも決して固定的な組織と勢力範囲を保持し続けていたとはいえない。図2の「モモリ、ニユルムナリの戦い」というのは(二)のタイプの相敵対する部族あるいは氏族の中のさらに小さなサブグループをなす生産単位の間で起った衝突を伝えるものであると考えるのが妥当であろう。

生産単位のグループも後代になるほど氏族原理よりも経済原理が強く作用するようになり、より有能なメンバーを集める努力が払われたり、冬は小グループに分散して毛皮獣を追い、夏は大グループを形成してトナカイの集団放牧による効率化を計って漁撈労働力を捻出することが行なわれるようになって^⑩いる。しかし、こうした場合でも各グループ内の相互依存、排他的な連帯感^⑪は強く、重要な決断の際にはシャーマンの儀式(カムラーニエ)が行なわれた。

以上のような諸事例においても察せられるように、北方民族においては一般に土地そのものに対する所有の概念はなかったとされ、自集団の家族に損害が及ばない限り、他集団の者がどこで放牧、狩猟、漁撈を行なっても咎める理由はなかったはずである。

しかし、現実には有利な場所は特定の者が排他的に占有しており、その権利が強く主張され、そこを継続的に利用するために争いが起った。そのような場所の占有は個人ではなく、古くは氏族、後になると経済原理に基づく生産単位のグループであったことは前述の通りである。一定の場所の集団的な占有の概念があったことになる。ただ、それは必ずしも固

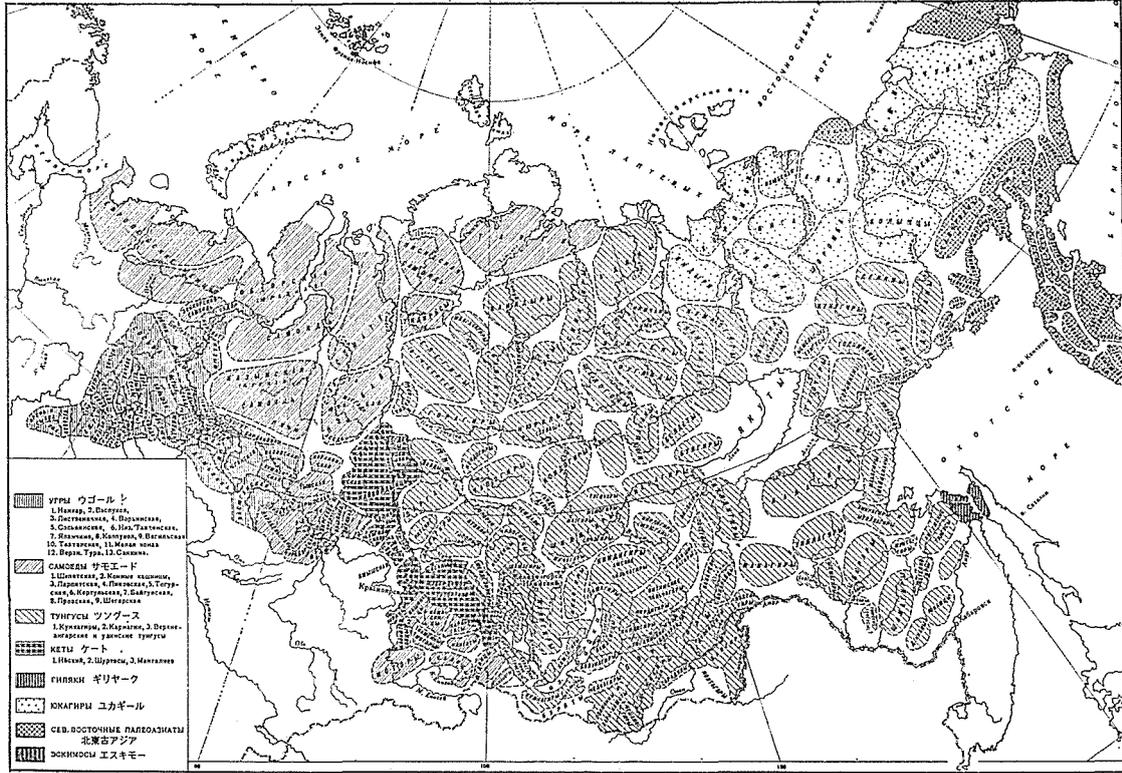


图3 17世紀の氏族・部族分布図の一例^⑩

定的なものではなく、力関係その他によって他の集団がその場所に入り込んでくることがしばしばあり得たのである。¹⁰⁾

通常、各グループは野生トナカイの渡河点(春は北へ、秋は南へ向う)の季節的移動ルート上にある、魚の豊富な河川や湖沼、あるいは海獣群棲地を「経済中心」として占有していたこととなる。それは農業社会のような均質地域的な領域ではなく、そうした「経済中心」を核とするきわめて不定形な中心地域的勢力圏が形成されていたと見るべきである。そこには事実上、地縁的な共同体が存在するようになって行ったとみてもよいと思われる。

中心の核となったのが河川であったことが多いのは前述の如くで、前記の(二)のタイプに入る一九一〇世紀初頭の大規模な氏族(または部族)集団をロシア人が河川名で呼んでいる例が多数見られるのもうなづける。そして、大規模な集団がサブグループに分れる場合もその河川の一部かその大小の支流の一部をそれぞれがほぼ占有する形をとったのである。いわば流域圏が階層構造をなすのである。このような領域では各グループ間の境界は決して明瞭である必然性はないが、地圏化された場合、大小の円形で示された例が多い(図3)。円と円の間にはいずれのグループの勢力圏にも属さない空隙が出来るが、実態は中心の核を遠ざかるにつれて、当該グループの占有意識は薄れると考えるべきで、周辺部(中心から数百キロ隔てた先ということがあり得る)にはだれでも自由に狩ができる場所があり得たことになる。空隙を縫って一同が元の場所を捨てて他地方へ移住する可能性もあった。ロシアの影響が早くから及んで、かなり固定的な村ができた西シベリアのハント、マンシ、南セリリプの各民族においても村界を示すものは特になく、「氏族」が絶えればその狩場は隣接の他のグループ(村)の利用に任されたといわれ、北方諸民族のこうした領域観の根強いものであったことがうかがえる。¹¹⁾

また、「経済中心」そのものの位置とは一致していなくても各領域内にはメンバー一同の精神的中心たる聖なる場所があり、犠牲を捧げて豊穡を祈るトーテムないし聖なる樹木が存在した。¹²⁾

シャーマン・チュムとはこうして、生産単位グループの生活圏たる領域を象徴的に表現したものであることがわかるのである。

- ① ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТРОЙ... стр. 7.
 ② ОТЛОВКО-РОДОВАЯ ОРГАНИЗАЦИЯ
 ③ В. О. Долгих. Типы отловко-родовой организации народов Севера. (ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТРОЙ... стр. 361.)
 ④ Там же. (стр. 363.) この方法はドルギフによるものが一般に用いられており、家族を加えた総人口はこれによって得た数を四倍すればよくとされる。以下、とくに断わらない限りヤサタ台帳人数を示す。
 ⑤ Там же. (стр. 364.)
 ⑥ Там же. (стр. 375.) この二三グループの人数より算出。
 ⑦ Там же. (стр. 376.)
 ⑧ В. О. Долгих. Племя у народов Севера. (ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТРОЙ... стр. 333-336.) じよれは氏族 (РСД) と部族 (ПЛЕМЯ) の問題は北方民族に関する古い文献に混乱があり、それらをさらにロシア行政当局が固定的な領域観から行政区画である「郷」(ВОЛОСТЬ) と同一視して混乱を一層深めた。なお、この発展段階の問題は、北方民族を事例に連の歴史学界ではさまざまな議論があり、さほど単純に割切れることも思われる。

- なつて来た。また一八世紀にすでにロシア人と接触が密になった地方には場所の賃貸が行なわれていた (В. О. Долгих, Основные черты отловко-родовых отношений у народов Севера. (ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТРОЙ... стр. 95-96).
 ロシアの行政組織が完備してくるに、元来、移動的な狩猟生活を基礎にしていた北方民族の領域はロシアの農業社会と同様な固定的領域と化し、行政区画化して行った。⑥の「郷」がそれである。新たな地域へ移住しようとする者は、その地域に住むグループの長の許可を要することとなり、それが許されなかった事例がチャロト、カムチャツカでも報告されている——И. С. Гурвич, Соседская община и правоотношения обеспечения маркх народов Севера. (ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТРОЙ... стр. 407.)——。
 北方地方に早く住みついたロシア人たちは原住民の生活様式を多くとり入れたにもかかわらず、頭初から固定的な領域を守っていたようである。И. С. Гурвич, Соседская община..., стр. 404.
 ⑨ И. С. Гурвич, Соседская община..., (стр. 389.)
 ⑩ Карта распространения этнических групп племя и родом Народов Севера в XVIIв. Составитель В. О. Долгих. (ОБЩЕСТВЕННЫЙ СТРОЙ... приложение) より一部。
 ⑪ И. С. Гурвич, Соседская община..., (стр. 403).
 ⑫ В. О. Долгих, Племя у Народов..., (стр. 336-337.)

四 領域内の地理的知識

生産単位としてのグループの生活圏に基づくとはいえず、観念的な空間認識である右のような概念とは別に、シベリア原

住民の間には他方、きわめて精度の高い地理的知識あるいはその判別技術があったことが伝えられている。それは現実生きて行くために必要な領域内つまり「中の世界」とその周辺に関してである。

これもまた民族誌の中にその事例を求めてみるとB=Aツゴルコフの著書に見出すことができる。^①

エベンキ族についてつぎのような方向、距離の判定技術があったことがその一つである。すなわち、二つのトナカイ遊牧グループが前もって一定の場所で所定の期日に会合することにした。それぞれ別の方向から一面の雪の広野を数百キロ踏破して、その会合点に両者は予定通り到達した。この話はアルセイニエの一九一八年の調査の記録に基づくが、このエベンキたちは星による一種の天測による旅行を行ない、昼は休息し、夜間に行動したのである。

いまひとつのエベンキ族の例は一九世紀頃中、オホーツク海沿岸のアヤンからネリカンに到るルートを調査していた測地隊がジグジュル山脈の中で遊牧中のイグナチ・カラムジンに出会った際のことである。かれは床に腹這いになって紙上にこの山脈の両斜面の水系を正確に描いてみせた。

ツゴルコフによれば、このような方位、地形の判定技術あるいは感覚ともいべきものは遊牧生活を営んでいる民族には代々受けつがれているものであって、いわばかれらの血となり肉となつていて、しかもよく、生きて行く上で不可欠のものとなつているのである。^②

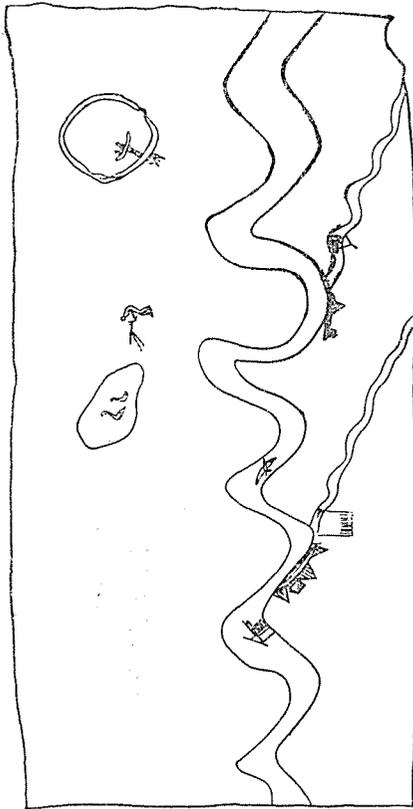
類似的例はユカギール族についてもツゴルコフが紹介している。インジギルカ川下流地方のユカギール族エンカチャンはインジギルカ・アラゼア両川間の「スケッチ」を描くよう調査隊長スクウォルツォフに頼まれるとかれとその隊員たちを驚嘆させるような「地図」を作ってみせたという。しかも北が上に描かれていたのである。^③

右の二つの例はいずれも探検隊の依頼によって紙上に描かれた図に関するものであるが、このような「地図」は原住民にとつては頭の中にあつたにすぎず、図化されることは本来なかつたものであろうか。ほとんどの場合、その通りであつたと考えられるが、一つ興味ある図化の事例がある。同じくツゴルコフが紹介しているコリマ川上流、ヤサチ川、コロコ

ドン川の諸地方のユカギール族の間に行なわれていた「トース」とよばれる絵図によるコミュニケーションの方法がそれである。^④ 白樺の樹皮にナイフの先で刻みつけられたさまざまな図の中で注目されるのが一種の地図である。

食料がとくに不足する春先に、かれらは少人数のグループに分散して狩猟を営んだが、その際グループ相互の行先を連絡する方法としてこのトースを描き、決められた樹木、崖などの洞にそれを残して移動して行ったのである。ユカギール族たちの夏の宿営地をまわって茶、タバコ、布地などを販売していたヤクト族の行商人もこの種のトースによって顧客の行方を知ることができたという。

トースがこのように利用できたのは、その図上で地物、距離、方位が判断できる程度に明確に描かれていたことと、共通の図式があったことによるといえる。線で示された行程路、炎の印の焚火の位置、丸印の宿営地、人間の姿による遊牧地などの表示の記号化が見られたのである。^⑤ ただ、図の縮尺は示されていなかったが、かれらにとって既知の領域内の図



④ 図4 コリマ川上流部のトース (19世紀末)

であるから、河川の屈曲、湖沼の形、崖の位置などを見れば即座に目的の場所とそこに到るルート、所要時間を判断できたに違いない。

今ここにツゴルコフが紹介しているトースの一つを例に上げてみる(図4)。これには北東シベリア独特の自然環境が見事に描き出されていることに注目したい。

永久凍土地帯を蛇行しながら流れ

るコリマ川とその支流が二川描かれているが、それらの合流点付近の三角形あるいは垂幕状のものは永久凍土層が河岸に迫っている崩壊崖であろう。このような急崖(しばしば二〇—三〇メートルの比高をなす)には巨大な地下水が露出しており、その露頭の形がそれぞれの崖の特徴のよい目印になっている。もっともその氷の形は夏期の融解によって年々姿を変えざるはずであるから、このトースが地図として有効な期間はさほど長くはないと思われる。

本流をはざんで支流と反対側に二つの湖沼が描かれている。水鳥が二羽浮いているのは陸地面と水面に比高差のほとんどない末期のサーモカルストであり、舟の浮いているものは湖岸がすり鉢状をさす若いサーモカルストの湖沼であろう。こうした湖沼について、現地の人々は魚のいるものといないものを熟知しており、この例では前者では狩猟、後者では漁撈が行なわれることを示していると思なすことが可能であろう。

筆者のごく短期間の踏査から考えてもこのようなトースを見ればだしも、これがどの場所を示しているかは一目瞭然であり、コミュニケーション^⑦の手段として十分な機能をはたしたと考えられる。

① B. A. Tyronikov, Ykas. paf. cnp. 54-55. 拙訳書六一頁。

② Tan ke. cnp. 55.

③ H. A. Tyronikov, KTO BA IOKALIPPI? (CHAVKA) M. 1979. cnp. 100.

④ Tan ke. cnp. 104-107. TOC は忍文として描かれたという例からはじまり、かれらの間の重要な情報交換手段であったとさまざまな例が引かれ、表意文字の原初的要素を備えていたと解説している。

⑤ ここでは地形図としての役割に焦点を絞る。

⑥ Tan ke. cnp. 107.

⑦ Tan ke. cnp. 101. (Iznan vachni vepkhnei Koshama. Toc. Koneu XIX b.)

⑧ 拙稿「コリマ川下流域とエドマ層」(名古屋市立大学教養部紀要人文社会研究25, 一九八一、一二九—一四五頁)。

おわりに——近代地図学との出会い——

以上、民族誌の分野に入ってシベリア原住民の地理的概念について考察して来たが、はじめに触れたようにかれらもっていたこうした概念あるいは知識が、さまざまな形で近代の地図製作過程に関与し、貢献したに違いないのである。^⑩

初期のシベリア図の中に記載されている原住民そのものの居住地やかれらの伝えた情報については、すでに若干ふれたことがあるが、^② 頭初にあげた「地理的発見アトラス」によれば、とくに探検・調査がおくれたチュコト半島からアレウト、アラスカにかけての知識に関して、一八世紀前半のベーリングの探検の前後にチュクチ族、アレウト族、エスキモー族のもたらした情報がロシアの毛皮商人、コサックらのそれと共に注目を惹いている。それらの諸情報を通じて明らかにされた事実のうちには、すでに一七世紀後半にはレナ川河口からアジアの北東端を経てカムチャッカ半島に到る航路が現地では知られていたらしいこと、チュクチ族はこれ以前から今日いうところのベーリング海峡を往復してアラスカの住民と交易関係、近縁関係にあったことなどがある。ベーリングの第一次探検の段階では、これらの原住民の情報が十分には蒐集されなかったことになるのである。ベーリング海峡一帯を居住域としていた諸民族にとっては、この一帯はいわば「中の世界」とその周辺であったはずで、かれらの持っていた情報がはじめは伝聞としてヨーロッパに伝わり、やがて絵地図として提供されるようになったと考えられる。原住民の知識をとり入れて作製された図の一例として一七六五年のダウルキン図と呼ばれるものをとり上げておこう。^③

そこに描かれているチュコト半島の輪郭は奇異であり、その上、シベリアの北方におおいかぶさるように「ポリシャヤー・ヤ・ゼムリア」がある。そして、この実在しないはずの大陸から岬がシベリアに向って伸び、チャウンスカヤ湾のやや西に「ヌイム島」が描かれ、これらを経てトナカイが「ポリシャヤー・ヤ・ゼムリア」からウランゲル島の対岸オムワイ(アムグエマ)川付近へ渡ってくる、というようになっている。

その一方ではチュクチ族が熟知していたチュコト半島、アラスカの岬、湾、川、この海域の島などが多数記載されており、その中には今日でも用いられている地名がある。^④

このようにこの図には曖昧な情報と確かなそれとが混合しているわけであるが、要は当時のチュクチ族、現地ロシア人、さらにはアラスカの住民の地理的概念がそこに反映している、と見ることができることである。シベリアの北に描かれた

大陸は実在しなかったが、東シベリア海からチュコト海にかけての沿岸、メドベージ、ウランゲルなどの諸島、それにアラスカにわたるかれらの間の知識が総合されたものであり、とくにこの海域の諸島は現地の人々には重要な狩猟地であったことは確かである。^⑤

しかし、天測によらず、経緯線も入らないダウルキン図の類は近代的な地図製作過程における一時期の空隙を埋めるものではあったが、時代遅れとなりつつあった。ベーリングの第二次探検が、やはりその時代を画する大事業であったゆえんである。

ただ、原住民の地理的知識はその後も今世紀前半まで、シベリア内陸部に関しては依然として有力な情報源でありつづけた。チェルスキーの東シベリア探検はいうに及ばず、ソビエト時代に入ってからオプルーチェフの探検においても原住民案内者の果たした役割は大きい。^⑥ 北東シベリア内陸の地図上の空白はスタル・ハヤト山地における氷河の発見をもつて塗りつぶされたが、ここに到ってようやく案内人にとってかわったのが一九四四―四六年に行なわれたこの地域の空中写真撮影であったのである。^⑦

① 観念的地理鏡の反映として、初期シベリア図における上が南下が北という種類の図の製作の由来を追求してみる価値がある。 ЧЕСКИНСКИЕОВАНИИ В 1725-1765 гг. <ТАВКА> М. 1960. стр. 208.

② 拙稿「チュクチ族の世界」(織田武雄先生退官記念人文地理学論叢)

昭46、「東シベリア・極東の地図化過程」(福井大教育学部紀要21) 昭46。

③ КАРТА ЛАВРКИНА, 1765 г. (Указ. АТЛАС..., пил. 128)

④ В. И. ПРЯКОВ, ОПЕРИИ ИЗ ИСТОРИИ РУССКИХ ГЕОГРАФИ-

⑤ Там же. ⑥ 東シベリアの山系・水系が正しく図画されたのは一九二六年および一九二九―三〇年のオプルーチェフの探検の結果である。 ⑦ Н. А. БВОДЦЕНКИИ, ГЕОГРАФИЧЕСКИЕ ОТКРЫТИЯ В СССР. <ПРЕСВЕЩЕНИЕ> М. 1978. стр. 72.

本稿は文部省科学研究費補助金総合研究A「地理思想の伝播と継承に関する比較研究」(研究代表者 一橋大学竹内啓一、課題番号 538022) による成果の一部である。

The Geographical Conception of Siberians

by

Shinji Saito

This article points out that geographical knowledges of natives in Siberia made certain contribution in the course of drawing modern maps for this district.

The geographical knowledges which they are said to have originally had, contains primitive cosmological aspects or spatial recognition. It is thought that such aspects are also very significant in the history of cartography or geography.

The research is made into the geographical conception of Siberians, following the ethnological study about Siberia. One character is found common in cosmological aspects of some peoples. It reflects what the territory or the sphere of the influence was then. The territory was formed for hunting and fishing by the small groups which had their origins in the paternal society. The borders might be mobile by mutual power-relations. The large territory consisted of small ones, whose axes were the branches of the river flowing in the whole big territory.

It is exactly such accurate geographical knowledges concerned with each territory of Siberian natives that contributed usefully to composing modern maps.

The Formation of the *Gekisei* 外記政

by

Yoshinori Hashimoto

The purpose of this article is to elucidate the character and the process of the formation of the *Gekisei* which was formed in the early *Heian* 平安 Era.

Hitherto the scholars have explained that the *Gekisei* was formed